

# 祐天上人と桂昌院

大正大学教授 玉山成元

桂昌院は三代將軍・徳川家光の側室であつた。そして正保三年（一六四六）徳川綱吉（幼名徳松）を生んだ。桂昌院の懐妊のとき、新義真言宗の亮賢は卜筮を求められた。そして「この子は必ず天下を治めるようになる」と上申した。その後、祈禱を命ぜられ、無事男子の誕生をみたため、これ以降も桂昌院のために祈禱を続けることになった。

延宝八年（一六六〇）五月、たびたび病床にあつた四代將軍・家綱が危篤となり、舘林二五万石の城主であつた綱吉は將軍家に迎えられた。そして家綱死後、江戸城本丸に入り、兄の後継者となつた。將軍となつた綱吉は、翌天和元年二月、生母・桂昌院のために、高田薬園の地に、祈願寺である護国寺を建立し、亮賢をその住持とした。元禄三年には護摩堂も完成し、祈禱寺としての体裁がととのつた。これ以後、綱吉は十六回参詣しているが、十四回は桂昌院の生前である。將軍が親子でのんびりできる日は、このときばかりである。ともに好きな論議を聴き、綱

吉も儒教の講義をして上機嫌になり、母とのそぞろ歩きを楽しんだ。

桂昌院は自分の祈禱寺を持つほどであつたから、仏教に対する信仰が厚かつた。浄土宗との結びつきは元禄七年ごろと思われる。この年、増上寺了也上人は江戸城三の丸にうかがい、延年転寿の法談を行つたが、これを縁として増上寺にも参詣し、法問を聴かれることが多くなつた。

このとき祐天上人は法問に出席するメンバーの一人であつた。とくに元禄十年の法問のときは、念仏は現在も未来も利益あるもので、下人のみが唱えるものではないことを明らかにしたため桂昌院は感激し、念仏に対する疑問を除くと同時に、上人に対して一目おくようになった。翌十一年三月九日に行われた「現世無比楽」の説法は、極楽に生れるすばらしさを説いたもので、一層の帰依をうるようになった。当時の祐天上人は、出世を好まず、牛島に閑居し、庶民の救済に心をくだいているときであつた。桂昌院はその様子を聞いて関心し、ぜひ大寺の住職にした

いと考えた。そこで將軍の綱吉にはかり、関東の名刹である生美（千葉県）の大巖寺に入ることを命じた。実力があり信望があつた祐天上人であつたが、これまで大寺の住職は断り続けていた。しかし將軍命とあれば、断ることもできず、元禄十二年二月大巖寺に入ることになった。そして翌十三年の七月には、以前、師僧・檀通上人について修行した、なつかしい飯沼弘経寺（水海道市）の住職になつた。

元禄十六年になると、桂昌院は体の不調に悩まされることが多くなつた。お灸をすえたり、終夜、祈禱を続けたりすることが多くなつた。三の丸では真言僧の隆光や快意が論議を行つたこともあつたが、七十七歳の老齡である。期待は無理であつた。心は極楽に向つていたのかもしれない。宝永元年正月、おちついた桂昌院のために、綱吉も出席して本復の祝儀が行われたが、二月に入ると新たな心配がおこつた。綱吉の長女で紀州の徳川綱教へ嫁した鶴姫の病状が悪化した。護持院・護国寺では、五十人の僧を集めて

# 祐天上人と桂昌院

大正大学教授 玉山成元

真読大般若法会を行ったが無駄であった。四月十二日夜、二十八歳で極楽に旅立った。かわいい孫娘の病状について桂昌院には知らせなかった。突然死を知らせることもできない。そこでまず風邪ぎみであることを告げ、されに病状の悪化したこと、そして万一のことがあっても悲しまないようにという配慮をした上、一週間後の十八日に死亡したことを告げた。成人したただ一人の子・鶴姫を失った綱吉も悲しんだが、桂昌院の哀しさも、これに増した。そして孫の極楽往生を真剣に祈った。翌宝永二年四月、ふたたび桂昌院は体調を崩した。綱吉は日常の行事の暇をみて、毎日のように見舞い、自らマッサージを続けると同時に、医者に病状をきき、薬の指示まで行ったが、快方には向わなかった。そして六月二十一日、増上寺前住・了也上人の十念を授かり、午前十時ごろ極楽に旅立った。七十九歳であった。少しも苦しまず、眠るように旅立ったという母の様子を聞いた綱吉は、仏の加護を信じ目を閉じた。「位人臣をき

わめ」一位にまで昇りつめた桂昌院に未練はなかった。極楽往生を信じ、蓮の台で主人・家光や鶴姫に会うことを楽しんでいたのかもしれない。そうした心境に到達できたのは、桂昌院の信仰もさることながら、生き仏と仰がれた祐天上人の教化があったからであろう。早くから祐天上人は大奥に召され、最後には善知識となつて十念を授けたという説もある。それは明らかではないが、それほどまで祐天上人を信頼しきつた桂昌院の姿を物語るものといつてよい。

翌二十三日、午後六時、桂昌院の棺は江戸城を出て増上寺に運ばれた。そして焼失後の仮殿で前住・了也上人が大導師となり、雲臥・門秀の二大僧をはじめ一山の大家衆が出席して法会が行われた。当時、祐天上人は伝通院の住職になっていた。そして、この三大僧正と同格の待遇をうけて江戸城でも接待されていただけに、法会に列席したことはいうまでもない。今日ある自分の立場を築いてくれた桂昌院に対する思いはひとしおであった